ISSN 2432-437X

人間文化研究機構　ネットワーク型基幹研究プロジェクト
地域研究推進事業　南アジア地域研究

FINDAS
The Center for South Asian Studies,
Tokyo University of Foreign Studies
東京外国語大学　南アジア研究センター

東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー　3

初期ウルドゥー語小説に現れる女性像

村上　明香

The Women Mirrored in the Early Urdu Novels

Asuka MURAKAMI

東京外国語大学拠点　南アジア研究センター
Center for South Asian Studies, Tokyo University of Foreign Studies (FINDAS)

研究テーマ「南アジアにおける文学・社会運動・ジェンダー」
Literature, Social Movements, and Gender Issues in South Asia

本拠点は、現代南アジアの構造変動に関する理解を、重層化・多元化・輻輳化する社会運動の歴史・政治・社会学的分析と文学分析、およびジェンダー視角を軸として深めることを目的とする。さらに、対象研究領域に関して、すでに東京外国語大学が所蔵する文献・史資料群を充実させることを系統的、意識的に追及し、国内における文献拠点となることをめざす。

本拠点の第 1 期（2010～2014 年度）の研究活動を通じて、経済自由化・グローバル化にともなう現代インドにおける構造変動が、個人、家族、コミュニティ・レベルの人々の意識、ジェンダー関係に劇的な変容をもたらしたこと、アイデンティティの複合性と可変性がさらに加速化していること、ならびに、インドを特徴づけている活性化された民主政治が、それまで社会的周縁に位置づけられてきた諸集団の積極的な異議申し立てなしには理解できないという事実が明らかになった。第 2 期（2015～2019 年度）では、社会運動の諸相をとくに、人的紐帯の変化、および、それらを支える情動や感性の側面に焦点をあてること、対象地域をさらに、南アジア地域に拡大するとともに、中国・東南アジア・イスラーム地域などの他地域との比較研究を意識的に組織化し、理論化を主導することに重点的に取り組む。

東京外国語大学は、ウルドゥー語・ヒンディー語・ベンガル語を中心に南アジアの諸言語の教育、および南アジア地域研究に関して明治期以来の長い歴史を有し、世界的に活躍する高度職業人ならびに日本における南アジア研究の中核を担う研究者を輩出してきた実績がある。また、国内有数の南アジア諸語文献・南アジア関連の文献・史料の所蔵を誇る。さらには、海外の南アジア研究者との学術交流にも長い伝統がある。こうした特長を最大限に生かしつつ、本拠点はさらに国内外の南アジア研究者のネットワークのハブとして共同研究を組織するとともに、若手研究者の育成を重点的に行い、南アジア地域研究のレベルを明示的に高めることをめざす。

研究ユニット 1「輻輳する社会運動における実践と理論」
研究ユニット 2「社会変動と文学」

FINDAS リサーチペーパーシリーズ 3

初期ウルドゥー語小説に現れる女性像

村　上　明　香

初期ウルドゥー語小説に現れる女性像 *

村上　明香 **

The Women Mirrored in the Early Urdu Novels*

Asuka MURAKAMI**

Abstract

An improvement of the state of women was the dominant theme of social reforms of India in the nineteenth and early twentieth centuries and this social characteristic was also reflected in Urdu literature of the time. The purpose of this paper is to show the striking feature of "women" depicted in the early Urdu novels. First I will introduce a novel, The Bride's Mirror (Mirāt ul-ʿarūs) written by Deputy Nazir Ahmad in 1869 which is also considered as the first Urdu novel and point out its impact upon the literary world. Secondly I will try to compare this novel with another one, Betterment of Women (Iṣlāḥ un-nisāʾ) written by Urdu's first woman novelist Rashid un-Nisa in 1881 and adduce examples of the radical differences between the "women" of the two novels, the one by a male author and the other by a female author.

はじめに

19 世紀半ばから 20 世紀初頭のインド社会の特徴のひとつとして、女子教育の普及や女性の地位向上が盛んに議論された点が挙げられる。その影響は当時の文学作品にも顕著に現れ、韻文・散文を問わず女性問題をテーマとした多くの作品が執筆された。中でも、ウルドゥー語最初の小説(nāvil)[1] であるとされるナズィール・アフマド(Naẕīr Aḥmad, 1831-1912[2])の『花

*本稿は 2015 年 7 月 4 日に開催された第二回 FINDAS 若手研究者セミナー「時代を映す南アジア文学――近代女性作家の作品から現代の読書傾向まで」での発表内容に加筆したものである。

** インド国立イラーハーバード大学博士後期課程在学（ウルドゥー文学専攻）

[1] どの作品をウルドゥー語最初の小説とみなすかという問題はこれまで長年にわたって議論され続けてきた。ムンシー・グマーニー・ラール(Munshī Gumānī Laʿl, ?-1881)の『魅惑の庭園(Riyāz-i dil-rubā)』(1832 年完成、1893 年刊行)、マウルヴィー・カリームッディーン(Maulvī Kalīmuddīn, 1821-1879)の『運命の文字(Khaṭ-i taqdīr)』(1862 年刊行)、ラタン・ナート・サルシャール(Ratan Nāth Sarshār, 1846-1902)の『アーザード物語(Fasānah-yi Āzād)』(1879 年完成)などが候補として挙げられるが、ナズィールの『花嫁の鏡』を最初の小説とみなすことが通説となっている。なお、自分の作品を「小説(nāvil)」と呼んだ最初のウル

嫁の鏡(Mirāt ul-ʿarūs)』(1869 年刊)は出版と同時に大きな反響を呼び、多くの作家たちがナズィールのスタイルを模倣した作品を執筆した。『花嫁の鏡』以降、20 世紀初頭までに多くの小説が執筆されたが [3]、この期間の小説群はウルドゥー文学史の中で取り上げられることも稀であり、これまで詳細な研究や内容分析がなされてこなかった。しかし、これらの小説群を分析することはウルドゥー文学のみならず、当時のインドのムスリム女性の生活やその諸問題を知るという観点からも大変重要であると考える。さらに、19 世紀後半は女性の文学界進出が目立ち始めた時代でもあった。彼女たちは男性作家らが描き出す女性像をどのように受け止め、さらに自分の作品の中にどのような女性像を提示したのだろうか。

本稿では、筆者がKhuda Bakhsh Oriental Public Library（パトナー、2015 年 4 月 16 日～20 日）、Urdu Academy, Delhi（デリー、2015 年 5 月 4 日～5 月 8 日）、Maulana Azad Library, Aligarh Muslim University（アリーガル、2015 年 5 月 13 日～18 日）での文献調査で入手し得た小説の中から、作品中で『花嫁の鏡』について言及している作品を紹介し、ウルドゥー語小説に与えた影響力の大きさの一端を示す。さらにその中の一冊、ウルドゥー語初の女性小説家とされるラシードゥンニサー(Rashīd un-Nisāʾ, 1853-1931[4])の小説『女性の改善(Iṣlāḥ un-nisāʾ)』(1881 年完成、1894 年刊行)と『花嫁の鏡』に現れた女性像について比較し、男性作家と女性作家の描く女性像の相違の一例を示したい。

『花嫁の鏡』の出版

ドゥー語作家はラタン・ナート・サルシャールであるとされている。1878 年、ラクナウーから出版されていた月刊紙「アワド新聞(Avadh akhbār)」に『アーザード物語』が連載されるようになると、読者から様々な感想や質問、書評が届き、シャラルは同紙の中でそれらに対する返答をするようになった。その中で『アーザード物語』を「小説」と記しているのが、現在確認できる中で最も古い例である[Mookerjee 1992: 87-89]。

[2] ナズィールの生年については諸説あるが、本稿ではコロンビア大学のフランシス・プリチェット教授が中心となって作成した Datelist of Urdu Literary Figures (http://www.columbia.edu/~asp49/?datelist)の生没年を採用した。ナズィールの生年についての議論は[Minault 1998, 33]の注記 55 に詳しい。

[3] [Suhrawardy 2006]、[Ṣiddīqī 2013]、[Blumhardt 1889]、[Blumhardt 1909]を参照し確認したところ、19 世紀半ばから 1914 年までに執筆された小説は 300 以上にのぼった。

[4] ラシードゥンニサーの生没年には複数の説がある。[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 205-208]収録の論考「ラシーダン・ビービー（Rashīdan bībī)」の中でスヘール・アズィーマーバーディー(Suhel ʿAẓīmābādī, 1911-1971)は 1855 年生まれ 1926 年没、同じく[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 219-232]収録の論考「ラシンダリー、ラシーダ、そしてルカイヤの夢（Rashindarī, Rashīdah aur Ruqqaya kā khwāb)」の中でザーヒダ・ヒナー(Zāhidah Ḥinā, 1942-)は 1853 年生まれとし没年については記載していない。また、ナーズ・カードリー(Nāz Qādrī）は論考「ウルドゥー最初の女性小説家(Urdū kī pahlī nāvil-nigār)」の中で、ファスィーフッディーン・バルヒー(Faṣīḥuddīn Balkhī)の著書『インドの女性列伝(Tazkirah-yi nisvān-i Hind)』には生年が 1855 年、没年が 1929 年と記されているがその根拠はなく、アースィファ・ワーセー(Āṣifah Vāsiʿ)の研究論文「ビハールにおけるウルドゥー小説(Bihār men Urdū nāvil-nigārī)」に記されている 1853 年生まれ、1931 年没が妥当であると述べている。本稿では複数の資料を比較検討したナーズ・カードリーの説を採用することとした。

『花嫁の鏡』は著者ナズィール・アフマドが自分の娘たちの教育用に執筆した作品で[5]、アクバリーとアスガリーという二人の姉妹の結婚生活の様子を通じて[6]、若い娘たちが生活の中で必要とされる技能や心構えが描かれている[7]。姉のアクバリーは祖母に溺愛されて育ったため、教養や家事などの技能を身に着けず、怠惰でわがままな性格から結婚後、様々な困難に見舞われる。それに対し、妹のアスガリーは教養があり家事も完璧にこなして家を支え、近所の少女たちのために自宅に塾を開いて教育を施すほか[8]、夫の立身出世にも貢献するなど、ナズィールの「理想」的な女性として描かれている。全 34 章構成のうち、初めの 2 章は導入部、続く 6 章は姉アクバリー、残りの 26 章は妹アスガリーの様子が書かれている。『花嫁の鏡』は初版刊行後 20 年間で出版部数 10 万部を記録したウルドゥー文学初のベストセラー本となり[Prichett 2001: 204]、インドの諸言語[9]や英語にも翻訳された。

さらに 1869 年、北西諸州政府(North-Western Provinces)がウルドゥー語とヒンディー語で著作、編纂、翻訳された優れた本に対して報奨金を与えることを決定すると、1870 年、『花嫁の鏡』は最高額である 1000 ルピーを授与されるとともに、北西諸州政府によって 2000 部が買い上げられた[Naim 2007: 54]。そしてナズィール自身、「（北西地方）政府の恩恵は私の望みとこの本の価値を言葉で表すことができないほど引き上げでくれた[Naẕīr 1978: 4]」と述べているように、この報奨金を授与されたことは、『花嫁の鏡』が名声を得るための大きな要因となったと考えられる。

北西諸州政府はこの報奨金の受賞条件として、①訓育(instruction)、娯楽(entertainment)、精神修養(mental discipline)のいずれかに役立つこと、②ヒンディー語もしくはウルドゥー語で書かれていること、③スタイルと表現方法に優れていることを挙げ、④特にインドの女性に適した本は特に期待に沿うものであり、十分な報奨が与えられるであろう、と付け加えた[Naim 2007: 47] 。このような条件が付与された背景には、イギリス植民地政府がインドの女子教育に大きな関心を抱いていたことがある。1869 年から 1874 年までの間に 125 作（ヒンディー

---

[5] ナズィールは、『花嫁の鏡』の執筆理由を序文で次のように述べている。「私は、道徳や教訓に満ちていて、女性たちが生活の中で直面するような事柄、迷信や無知、曲解のためにいつも悲しみや災難に囚われてしまうような事柄について、彼女たちが考えを改め、習慣を正してくれるような、さらに彼女たちが飽きてしまったり、狼狽してしまったりしないように、面白い形式で書かれた本を探した。しかし、すべての図書館をしらみつぶしに探したが、そのような本に出合うことはなかった。その時、私はこの物語（の創作）を決心した[Naẕīr 1978: 4]」。

[6] 良い手本となる人物と悪い手本となる人物を対照的に描いて教訓や道徳を教えようとする手法は、小説以前のウルドゥー散文文学にも見られる。今回の文献調査で入手した資料の中に『女性の鏡(Mirāt un-nisāʾ)』という物語（ḥikāyat）集が含まれている。この物語集は 1864 年にビービー・ファーティマ(Bībī Fāṭimah)という女性が執筆し、1870 年にカーンプルより出版された[Bībī Fāṭimah 1870: 7]。長短 40 の物語が収録されており、第 1 話にはふたりの兄弟の嫁の様子が、兄の嫁が悪い手本、弟の嫁が良い手本として描かれている。『女性の鏡』に含まれる物語の主なテーマは夫への献身、料理や裁縫といった家政学を身に付けることの大切さ、パルダの遵守、外部の女性がもたらす悪影響など、『花嫁の鏡』に類似している。文章の洗練度や主題の明確さといった点から評価することは難しいが、1864 年という完成年が正しければ、女性によって書かれたウルドゥー散文の初期の作品として非常に貴重な資料であるといえる。

[7] 主な登場人物については資料 1 の『花嫁の鏡』相関図を参照のこと。

[8] アスガリーの塾での教育についてはナズィールの第 2 作目の小説であり『花嫁の鏡』の続編である『大熊座(Bānāt un-nāʾsh）』(1872 年刊行）に詳しく描かれている。『大熊座』に対しても、北西諸州政府から 500 ルピーの報奨金が授与されている。

[9] ベンガリー、グジャラーティー、ヒンディー、マラーティー、パンジャービー、カリミ―リーの 6 言語に翻訳された[Āʿẓmī 1974: 140]という説と、ベンガリー、ブラジ、カシミーリー、パンジャービー、グジャラーティーの 5 言語に翻訳された[Russell 1992: 265]という説がある。

25 作、ウルドゥー語 100 作）がこの報奨金を受賞し、作品分野の内訳が女子教育 25 作、道徳 23 作、種々雑多 21 作、科学 17 作、小説 11 作、歴史 11 作、詩・戯曲 9 作品、言語 8 作品であったことからも、政府の女子教育への関心の高さをうかがい知ることができる[Kalsi 1990: 34]。『花嫁の鏡』はナズィールが娘の教育のためにウルドゥー語で書いた著書であり、①と②および④の条件を満たしていた。さらに、条件③について当時の公衆教育長(Director of Public Instruction)であったマシューズ・ケンプソン(Matthews Kempson, 1831-1894)は『花嫁の鏡』に宛てた書評の中で、文章や表現方法に優れたウルドゥー語の優れた手本であり[10]、「この本が評判になれば、何百人という人が好んで読むことだろう。そして、女性の教育にとって必ずや有益なものとなるだろう [Nazīr 1978: 201]」と評している。さらに当時、北西諸州政府知事であったサー・ウィリアム・ミュアー(Sir William Muir)もまた、ケンプソンの評価に賛同するとともに、インドの女性たちが読むのに大変適した本であるとし、「ムハンマド・ナズィール・アフマドが大いなる称賛に値するのは、真実に向かう新たな道をつけたということ、そして平易でシンプルな文章で、有益かつ興味深い作品の手本を他の者たちのために生み出した、ということである[Nazīr 1978: 203]」と賛辞を送った。そして、ケンプソンが書評の中で「ほかの多くの人々もこの作家に続くことを望む[Nazīr 1978: 200]」と述べたように、ナズィールのこのスタイルに倣った小説が世に多く産み出されることになった[11]。

当時の資料に見る『花嫁の鏡』

前述したように筆者は 2015 年 4、5 月にパトナー、デリー、アリーガルの 3 都市において文献調査を行い、19 世紀に書かれた小説および 19 世紀後半から 20 世紀前半に北インドで出版された女性雑誌を中心にデータを収集した。その結果、それらの小説や雑誌の中に『花嫁の鏡』に関する記述を見出すことができた[12]。女性雑誌にこの作品の関連記事があろうとは予想していたが、小説の本文の中でまで言及されていたことは筆者にとって新たな発見であり、この作品の影響力の強さを改めて感じさせられた。その例として、以下では 19 世紀に書かれた小説 2 作を紹介する[13]。

---

[10] ケンプソンは『花嫁の鏡』をウルドゥーの詩人ミルザー・アサドゥッラー・ハーン・ガーリブ(Mirzā Asadullāh Khān Ghālib, 1797-1869)の書簡集を引き合いに出し、「（文章や言葉の表現方法という）点において、ミルザー・ナウシャー・デヘラヴィー、雅号ガーリブの、近年刊行された書簡集に並ぶものである」とすら述べている[Nazīr 1978: 200]。

[11] ナズィールに倣った作品については[Ṣiddīqī 2013]および[Suhrawardy 2006]に詳しい。前者には 21 人の作家と 36 作品が、後者には 7 人の作家と 12 作品が挙げられている。

[12] 今回の調査で収集した女性雑誌は、北インドから刊行されていた主要雑誌『女性の教養（Tahzīb un-nisvān)』（1898 年ラホール刊）、『婦人(Khātūn)』（1904 年アリーガル刊）、『純潔（ʿIṣmat）』（1908 年デリー刊）である。すべての巻号を発見できたわけではないが、今回入手できた『花嫁の鏡』に関連する記事の題目をここに記録する。『女性の教養』誌、1918 年 1 月 26 日号掲載記事「少女たちのための本（Laṛkiyon ke liye kitāben)」、『婦人』誌、初巻初号掲載記事「女性教育要綱(Niṣāb-i taʿlīm-i nisvān)」、『純潔』誌、2 巻 5 号掲載記事「小説執筆の技術（Fann-i nāvil-nigārī）」および 19 巻 1 号掲載広告「女性用文学のあれらの本（Zanānah liṭrecar kī vah kitāben）」

[13] [Ṣiddīqī 2013: 219]によると、サイヤド・ファルザンド・アフマド・サフィール・ビルグラーミー

1 作目は、詩人として有名なシャード・アズィーマーバーディー(Sayyid ʿAlī Muḥammad Shād ʿAẓīmābādī, 1846-1927)の『内祝い(Badhāvā)』である[14]。Badhāvāとは、子の誕生や結婚などの祝い事の際の贈り物のことであり、シャードはこの作品を妻の弟アリー・ミールの結婚祝いとして執筆した。Badhāvāには装飾のたくさんついた豪華な衣装が贈られるが、シャードは、豪華な衣装よりも誰もが驚くような道徳を身に付けることが大事である、そこで外見ではなく道徳心を着飾るための 4 着の衣装を送る、としてこの作品を①この世に男性と女性が存在する理由、②夫婦間に不和が生じる理由、③妻に教育を与える理由、④社会の状況と家の切り盛りについて、の 4 章構成でまとめた。この第 4 章の中で著者は、家計の管理や掃除、使用人の扱いなどについて記述した箇所で次のように記している。

「『花嫁の鏡』や『大熊座』の美しい書籍を枕元に置くように。そして時々、その中の数行を、折を見て読み聞かせるように」[Shād 18--?: 22-23]

『花嫁の鏡』はこの中で、女性たちが家庭を維持管理するうえでの必読書として高く評価されている。

2 作目は、ウルドゥー文学最初の女性作家、ラシードゥンニサーの小説『女性の改善』である。これは、現在ビハール州の州都であるパトナー（旧アズィーマーバード）に住むある家族の様子を親子 3 代にわたる長いスパンで描いた作品で、その特徴は結婚、出産、育児、近親者の死、宗教儀礼や行事、といった女性が一生のうちに経験するであろう冠婚葬祭を含む人生の節目について、詳細に記されている点にある。この中で、登場人物のひとりであるアシュラフンニサーは、女性たちが誤った慣習や旧習にどれほどの金銭を浪費し、いかなる困難を招くことになるかを 1 冊の本に収めたいとの願望を、腹違いの妹アミールンニサーに打ち明ける。それはまさに『女性の改善』の内容そのものであり、著者はこの小説を執筆することになった動機や目的を、彼女の口を借りて語っているように思われる。以下は、アシュラフンニサーとアミールンニサーの会話部分である。

「アミールンニサー : マウルヴィー・ナズィール・アフマド氏も本を書いたわよね？ 『花嫁の鏡』の中にアクバリーとアスガリーの様子を書いたけれど、それでみんなアスガリーになったかしら？

アシュラフンニサー : みんながアスガリーにならなかったとしても、100 人のうち 75 人はアスガリーになったわ。そして、25 人はアクバリーのまま残ってしまった。それでは効果がなかったと言える？マウルヴィー・ナズィール・アフマド氏の本は多くの文盲な

(Sayyid Farzand Aḥmad Ṣafīr Bilgrāmī, 1834-1890)もまた、自身の小説『講話の本質(Jauhar-i maqālat)』（1886 年完成）の序文で『花嫁の鏡』について「（読者に）喜びを与える小説の内容とはどのようなものであるべきか。私が思うに、良作を模倣するのが適切だ。つまり、ヨーロッパにおいてはジョンソンの『ラセラスの物語』、そしてインドにおいては『花嫁の鏡』の。その結果は間違いなく改善の様相と効果をもたらすだろう。それ故、私はこの小説をそのスタイルで始めた」と述べている。[Ṣiddīqī 2013: 219]にはこの小説がフダー・バフシュ・オリエンタル・パブリック・ライブラリーに所蔵されていると記載されていたが、今回の調査では発見することができなかった。またナズィール・アフマドの『大熊座』の中にも、アスガリーの義妹マフムーダが「『花嫁の鏡』や『幾つかの忠告の書(Risālah-yi cand pand)』などから従順であることと早起きの得について聞かせていました」と語る場面が描かれている[Nazīr 2006: 30]。

[14] [Ṣiddīqī 2013: 216]はこの作品を「何とか小説と呼べるかどうか」の程度であると評している。短さや文体から小説と判断するのは難しいが、『祝いの品』について言及している [Ṣiddīqī 2013]や[Ashrafī 2001]はいずれもこの作品を小説として扱っているため、本稿では小説として紹介した。しかし、筆者の参照した版とこれらの研究書が参照した版が異なるため、この問題については現在調査中である。

女性を読み書きのできる女性に、無駄遣いをする人からやりくり上手に、不作法者から礼儀正しい人にしたのよ。…〈中略〉…彼の本を読むことで、女性たちは大きな利益を得たわ。彼は自分が知っている限りのことを書いた。そして今度は私が、知っていることをインシャーアッラー、書くことにしましょう。この本を若い女性たちが読めば、インシャーアッラー、みながアスガリーとなるでしょう。…〈中略〉…この私が書いた本を読むことで、女性たちはより大きな影響を受けるでしょう。彼女たちは、女性にまつわる慣習について書いてあることはすべて女性の著者自身の目で見たことを書いたと思うはずよ。[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 161-162]」

この会話から、著者が『花嫁の鏡』を強く意識してこの作品を執筆したこと、そしてナズィールの功績を認めつつも、自分の作品のほうが女性たちに大きな影響を与えることができる、と考えていることが伺える。それでは、彼女の描く女性とナズィールの描く女性にはどのような共通点、および相違点が見られるのであろうか？

『花嫁の鏡』と『女性の改善』に現れる女性

19 世紀後半の北インドでは、女子教育の普及や女性の地位向上が盛んに議論されたが、その結果として望まれたのは女性を夫の良き連れ合い、子供の良き母親、良き主婦、そして良きムスリマ（女性ムスリムの意、迷信や慣習から解放された、シャリーア＜イスラーム法＞を遵守する女性）にすることであり、それはつまり「女性がよりアスガリーやズバイダ・ハートゥーン[15]のようになる」ことであった[Minault 1998: 55][16]。アスガリーに映し出された「理想」女性像は、ナズィール、つまりは当時のインドの家父長制社会が望んだ「理想」であったと言うことができるが、ラシードゥンニサーの小説『女性の改善』の内容を吟味すると、彼女もまた同様の「理想」を持っていたことがわかる。それは、先に引用したように、著者がアシュラフンニサーに「この本を若い女性たちが読めば、インシャーアッラー、みながアスガリーとなるでしょう」と語らせていることからも明らかであろう。しかし、両作品に描かれる女性を比較すると、女性たちに要求されている条件の度合いにおいて相違が見られる。さらに、『女性の改善』にはこの「理想」を巡り、『花嫁の鏡』には描かれない女性たちの姿が映し出されている。以下では、「理想」の女性の 4 条件の中から、①夫の良き連れ合いとして、②良きムスリム女性としての 2 点に絞り、両作品に描かれた女性について考察したい。

---

[15] 同時代の詩人・散文家アルターフ・フサイン・ハーリー(Khwājah Alṭāf Ḥusain Ḥālī, 1837-1914)の女子教育をテーマとした小説『女性の集会(Majālis un-nisā)』に登場する女性で、ハーリーにとっての理想の女性像が反映されている。

[16] ナズィール・アフマドは、物語の導入部分において、次のような言葉でアスガリーを紹介している。「年少の頃からクルアーンの翻訳と諸問題のウルドゥー語の本を読んでいた。書くこともできた。母がデリーにおり、父が仕事でよその地にいる時には、デリーにいる間ずっと家の様子を父に毎週手紙に書いて送っていた。あらゆる種類の服を縫うことができたし、多種多様なおいしい料理の作り方も知っていた。…（中略）…母の家の管理はすべてアスガリー・ハーナムに委ねられていた。父が休暇を得て家へやって来たときには、家のやりくりについてアスガリーに意見を求めた。金銭や物置、タンスの鍵はすべてアスガリーが管理していた。アスガリーの慎み深さや明敏さを見て、両親は心底アスガリーを愛していた[Nazīr 1978: 28]」

１．夫の良き連れ合いとして

夫の良き連れ合いとしての「理想」は両作品ともに共通して、「夫婦円満な家庭を保ち、夫に従順でありながら、時には夫に的確な助言を与えることができる妻」である。そして、『花嫁の鏡』では「夫に助言する妻」の姿がことさら強調されている。[Nazīr 1978]には各章に題名が付けられており、アスガリーについて描かれた全 26 章のうち第 23 章「アスガリーは夫に遊びをやめさせ、勉学へ向けさせた」、第 27 章「アスガリーは夫を職に就かせる」、第 28 章「アスガリーが諭し、ムハンマド・カーミルはよその地へ赴いて出世する」、第 29 章「ムハンマド・カーミルの放蕩、アスガリーは出向いて彼を更生させる、そして出かける際に姉とその夫を家に定住させる」と、4 章に渡ってアスガリーが夫、ムハンマド・カーミルに助言をし、より良い方向へと導く姿が描かれている。そればかりか、第 30 章「アスガリーの助言により、マウルヴィー・ムハンマド・ファーズィルは年金を得て、自分の役職にムハンマド・アーキルを就かせる」では、アスガリーは義父であるムハンマド・ファーズィルにさえ助言をし、義理の兄であるムハンマド・アーキルをも出世させてしまうのである。ただし、ナズィールは同時に夫に従順な妻であることも要求している。例えば、第 10 章「結婚した少女たちへの優れた教訓」にはアスガリーの父が娘に宛てて結婚生活の心構えをしたためた手紙の内容が綴られているが、その中でナズィールは夫に対して従順であることや、男性は女性よりも優位な立場にあることを何度も繰り返し述べている。つまり、ナズィールの描く「理想」の妻は、従順でありながら、いざという時には夫の仕事や交友関係など、家の外の問題にまで的確な助言をすることのできる女性なのである。このように家の外の事情にも明るい女性の姿は、従来にはない新たな「理想」の女性像であったと言えよう。

一方、『女性の改善』にも夫に助言する妻の姿が描かれているが、たった 3 か所、それもわずか数行が割かれているのみで、助言の内容もアスガリーに比べてかなり控えめなものに留まっている。『女性の改善』には、器用で教養のある女性を妻に迎えた兄ムハンマド・アーザム一家と、無知で性格が悪く、因習や迷信に縛られた女性を妻に迎えた弟ムハンマド・ムアッザム一家の話が描かれている[17]。アーザムにはひとり息子イムティヤーズッディーンが、そしてムアッザムにはひとり娘ビスミッラーがおり、やがてふたりは結婚する。ビスミッラーは母親そっくりの女性に成長し、夫の忠告も聞かず、ある日「もう一人妻を迎えるつもりならそうすればいい」と（文字が書けなかったので代筆してもらい）手紙に書き送る。それを機に、夫は彼女とは正反対の「読み書きができ、技能に優れ、上品で優しく、礼儀正しく、節度ある[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 123]」ラフマトゥンニサーをふたり目の妻として迎える。『女性の改善』で妻が夫に助言する３か所のうち 2 か所は、ラフマトゥンニサーによるものである。

【助言①】

「ある日、（イムティヤーズッディーンは）妻に尋ねた。「もし君が言うなら、副代理官(Sub Depty)の試験を受けようと思う。僕はこの試験、きっとうまくやれる。」

妻「管理しながら使う分にはあなたの収入だけで十分ですが、もし合法的にお金を得られるのであれば、逃す手はありません。ぜひ試験を受けてください」

[17] 主な登場人物については、資料１の『女性の改善』相関図を参照のこと。

妻のこの言葉で、イムティヤーズッディーンは試験に対してとても興味を持った。父に許しを得て、副代理官の試験を受けた。幸運にも、試験に合格した。[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 129]」

【助言②】

「ある日、妻は夫に言った。もう家の支出については把握できました。決して1か月75ルピー以上にはなりません。これからは、お義母さんとお義父さんにも送金をするべきです。あなたの扶養になっている訳ではありませんが、とても喜ぶことでしょう。それから、上の夫人（ビスミッラーのこと）にも、月々の手当てを送ってください[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 136]」

ラフマトゥンニサーの助言がアスガリーよりも控えめなのに対し、ビスミッラーの受ける仕打ちは、『花嫁の鏡』で姉アクバリーの受けるそれと比べて非常に悲惨である。アクバリーの夫は、妻がいくらわがままで無能であろうと、決して彼女を見捨てない。それに対し、ビスミッラーは自分の言動が導いた結果であるにせよ、夫がもうひとり妻を迎えるという苦痛を味わうことになるのである。

最後は、イムティヤーズッディーンとビスミッラーの息子ナズィール・アーザムに対する妻サルダール・ドゥルハンの助言である。母親や祖母をぞんざいに扱う夫に対して妻は、年長者を敬うことの大切さや、短気を起こさずに愛情をもって接することの大切さを語って聞かせる。ナズィール・アーザムは妻のこの言葉を実践し、彼のこの変化に母親と祖母も喜び、嫁であるサルダール・ドゥルハンをそれまで以上に丁寧に扱うようになる。このように『女性の改善』の女性たちは、家の外の事柄に対して自ら積極的に助言することはない。彼女たちが進んで助言をするのはいずれも、家庭内の問題に限られており、その頻度もかなり低い。

２．よきムスリム女性として

良きムスリム女性という点に関しては、両作品ともにシャリーアに規定されていない慣習としての儀礼や、それに伴う様々な儀式、迷信等を批判し、それらを簡素化または廃止することの必要性が綴られている。中でも、『女性の改善』ではこの点が特に強調されている。ラシードゥンニサーがこの点をいかに強調していたかは、この中に挙げられた禁止すべき慣習としての儀礼やそれに伴う儀式、迷信等を抽出してリスト化した[資料 2]を比較・対照すれば明らかである。当時の儀礼や迷信等についてここまで詳しく書かれた文献は珍しく、当時の女性たちの生活の実態を知る上でもこの小説は大変貴重な資料であると言える。さらに、各儀礼で用意される食事や食材、料理したり盛り付けるために使用される道具や食器類、仕立てられる服やその生地の名前なども事細かに記されており、当時の衣食住に関する物品についての優れた資料でもある（［資料 2]参照］参照）。例えば、結婚に関する儀礼を［資料 2]の『女性の改善』【1．止めるべき慣習としての儀礼】一覧に挙げた項目のうち、イマーム・ザーミン（上腕に付ける護符）の儀式からチャウティー（挙式４日目の儀式）までは、すべて結婚に関連した一連の儀式である。多々ある儀礼の中でも、特に結婚は人生最大の儀礼であり、膨大な時間と資金が投入された。ラシードゥンニサーが、この結婚儀礼に全 201 ページ中の約 70 ページを当てていること、さらにこの［資料 2]の一覧に挙げた内容を参照すれば、婚儀が当時どれだけ重要視されていたか、そしていかに煩雑で出費の嵩むものであったかを

うかがい知ることができる。それに対し、両作品中で「理想」とされる婚儀は二カーフ(nikāḥ)と呼ばれる結婚契約の儀式のみと、大変簡素である。『花嫁の鏡』の中でアスガリーは、望ましい婚儀のあり方としてマウルヴィー・キファーヤトゥッラーという人物の例を挙げ、次のように述べている。

「ある日、2〜4 人の知り合いを呼び寄せました。客人が家へ来てみると、娘の二カーフ（結婚契約の儀式）だというではありませんか。しばらくして、婚家の人々が息子を連れてやってきました。結婚の儀を執り行ってもらい、アッラーの祝福とともにすべてが終わりました[Naẕīr 1978: 182]。

『女性の改善』では、好ましい婚儀のあり方としてイムティヤーズッディーンとラフマトゥンニサーの例が挙げられている。

「シャリーアに基づいた結婚であったので、煩雑なことは全くなかった。ただ 1 着上等な服が仕立てられた。10 ルピー分のヌクル（nuql：甘味菓子の一種）と干しナツメヤシを取り寄せた。マウルヴィーに結婚の儀を執り行ってもらった。イトル（ʿiṯr：香油）・パーン（pān：キンマの葉にビンロウジの実などの薬味を巻いて噛む嗜好品）の後、客たちに上等な食事が振る舞われた。ラフマトゥンニサーは実家を後にし、婚家へやってきた[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 126]」

このような婚儀が「理想」とされた背景には、シャリーアの遵守という宗教的理由のみならず、経済的理由が関与していた。1857 年、ムガル帝国が滅亡し、政治的権力がイギリス統治政府へと移譲されると、従来ムガルの宮廷に仕えてきたムスリムコミュニティー[18]は社会的、経済的に大きな打撃を受けた。優位な立場を保持するために西洋式の教育を受け、新政府に職を求めようとする者が現れた。こうした男性社会の状況や生活の変化に合わせ、女性たちもまた家計の見直しや経済的・宗教的に無用な慣習の廃止などが求められた [Minault 1998: 173]。ラシードゥンニサーが儀礼や迷信をここまで詳細に描いたのもまさにこのような理由からであり、そこでは［資料 2]に挙げられたような儀礼や迷信的行為を行うことがいかに背信的で金銭的無駄であるかが繰り返し語られる。この小説のなかで、著者ラシードゥンニサーがここまでこの点を強調したのは、彼女がこの点において女性たちを「改善」することこそこの小説を執筆する動機と目的であると考えていたからである。彼女はそれを、イムティヤーズッディーンとラフマトゥンニサーの娘、アシュラフンニサーの口を通して明らかにしている。

「一見、本当の話のようだけれど、実は素晴らしい教訓を含んでいるような本、悪習や無用な噂話ゆえに女性たちを無駄な浪費に走らせ、神に対して罪深い信徒とし、災難に陥れている悪習をすべてありのままに映し出した本を書きたい、私はずっとそう考えていたの。その本を読むことで、宗教的にも道徳的にも同性である女性たちに利益を与え

[18] 彼らはシャリーフ（「高貴な」の意。複数形はアシュラーフ）と呼ばれる階層に属していた。シャリーフとはサイヤド（預言者ムハンマドの直系）、シャイフ（アラブに起源をもつ、預言者ムハンマドの仲間たちの子孫）、ムガル（またはミルザー、中央アジアやイランに起源をもつ）、パターン（アフガニスタンからの移民）に属する人を指していたが、19 世紀後半には高貴な生まれであるよりも、「優れた品性（高潔、厳格、教養のある、社会的地位のある）を有する者[Minault 1998: 5]」という意味が強調された。彼らの多くは中産または上位中産(upper-middle)階級に属していた。ナズィール・アフマドとラシードゥンニサーもこの層に属していた。

ることができるように。 [Rashīd un-Nisāʾ 2007: 161]」

しかしそれと同時に、著者ラシードゥンニサーは、慣習として深く根付いてしまったこれらの儀礼や迷信を女性社会から排除することの難しさをも悟っていたと考えられる。それ故、彼女の描く女性たちは、アスガリーの説得によってシャベ・バラートの爆竹[19]を諦める義妹マフムーダや、アスガリーが教育を施すことで無作法者から優れた女性に一転してしまう良家の子女、フスン・アーラーのように急激に変化することはない。『女性の改善』の特徴のひとつに、3 世代という長いスパンに渡る女性たちの様子が描かれているということが挙げられるが、ラシードゥンニサーは世代毎に「理想」的な女性とそれに相反する女性、言い換えれば「改善」が必要であるとみなされた、当時の女性たち現実により近い姿を反映した女性が配置されており、両者が交わることで少しずつ「理想」に向かって変化していく女性の姿が描かれているのである。

第 1 世代を代表する主な女性は、ムハンマド・アーザムの妻、そしてムハンマド・ムアッザムの妻である。さらに彼らと同世代、またはそれ以前の世代の主要な人物として、アーザムとムアッザムの妹であるカリームンニサー、ムアッザムの妻の叔母が登場する。このうち、ムアッザムの妻とその叔母は慣習としての儀礼や迷信の類を信じて疑わず、それら行うことを当然であると思っている。[資料 2]で挙げた儀礼や迷信のほとんどはこの世代によって行われてきたものである。例えば、結婚に伴う儀式のうち、イマーム・ザーミンの儀式、花嫁を迎え入れる儀式、家を満たす儀式【花婿の家】、そしてナマーズ以外の儀式はすべてムアッザムの妻によって娘ビスミッラーの婚儀として行われたものである。ムアッザムの妻とその叔母の口からは度々、「でも慣例ではこうだから(magar dastūr to yahī hai) [Rashīd un-Nisāʾ 2007: 45]」、「これらはすべて、先祖代々行われてきたことだから(ye sab bāten baṛon se hotī ā'ī hain)[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 51]」、「世の習いだ(zamāne kā dastūr hai) [Rashīd un-Nisāʾ 2007: 53]」などという言葉が発せられ、結果として、それらに反対する側の人間（アーザムとその妻、ムアッザム、カリームンニサー）が妥協せざるを得なくなり、すべて彼女たちの望む通りに事が進められる。

第 2 世代にはイムティヤーズッディーンの二人の妻、ビスミッラーとラフマトゥンニサーがいる。ラフマトゥンニサーの夫への接し方を目の当たりにし、己れの過ちに気が付いたビスミッラーは「どうして誰も私に考えさせてくれなかったのかしら。それに私は、自らの意志でこうすることはできなかった。だって、実家では見たことがなかったのですもの。ああ、私の実家のやり方は、なんてひどかったのかしら[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 142]」と後悔し、改善する努力を始める。慣習としての儀礼や迷信などに関しても、それらを嫌う夫の要求を多少は受け入れるようになるものの、内緒で儀式を行う場面もある。例えば、[資料 2]で挙げた婚儀に伴う諸儀式のうち、イマーム・ザーミンの儀式、花嫁を迎え入れる儀式、家を満たす儀式【花婿の家】、そして花嫁のドゥパッター（dupaṭṭā：一方の肩、または両肩にゆったりとかけて着用するストールの一種）で行うナマーズは、ビスミッラーが息子の結婚に際して夫に隠れて執り行ったものである。つまり、彼女はなぜこれらの儀式が禁止されるべきなのかを

[19] イスラーム暦第 8 月、シャーバーン月 15 日の晩、アッラーによって信徒たちの翌年の運命が定められるとされている。

理解しているわけではないのである。

第 3 世代の女性には、ラフマトゥンニサーの娘アシュラフンニサーと、ビスミッラーの娘アミールンニサー、息子ナズィール・アーザムの嫁サルダール・ドゥルハンがいる。アミールンニサーは父方の祖母（アーザムの妻）のおかげで読み書きが多少できるようになるが、勉強以外の時間は母方の祖母（ムアッザムの妻）と母（ビスミッラー）の傍で過ごしていたため、礼儀作法などを習わずに育った。それが影響して、彼女は結婚後、婚家の人々との折り合いが悪く、ついには言い争いとなって婚家を飛び出す。しかし、アシュラフンニサーや兄嫁であるサルダール・ドゥルハンが、彼女に教育の大切さや夫や婚家の人々との関係の保ち方、誤った慣習や迷信を捨てることの大切さなどを長期にわたって話し聞かせたことで、アミールンニサーは夫や婚家の人々との関係も改善し、幸せな結婚生活を送るようになる。そして小説の終盤では、誤った慣習や迷信がいかに有害かを他の女性たちに説得する立場へと逆転するのである。

このように、著者はナズィール・アフマドを初めとする当時の男性たちが望む「理想」の女性像に共感を示す一方で、慣習にがんじがらめになった女性たちを「改善」する難しさをも痛感していた。それ故、結婚に伴う儀式を夫に隠れてまでやり遂げようとするビスミッラーの姿を描き、それに対して嫁であるサルダール・ドゥルハンの母に「まだすべての女性が教育を受け、習わしを悪習と認識することができる時代ではないのだから。そんな時代になるには、まだ 30～40 年はかかるわ[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 173]」と語らせているのである。さらに、ラシードゥンニサーは新しい時代の到来にためらい、困惑する女性の姿をも描いている。アーザムの妻の叔母は言う。

> 「学校やマドラサと教育、これらはすべて新しいことだから。私たちが一体何を知っているというの。今や、新しい時代がやって来た。新たな理解が生まれた。それらすべて、私たちは今まで聞いたこともなければ、見たこともない。私たちが知っているのは先祖から受け継いだことだけよ[Rashīd un-Nisāʾ 2007: 71]」

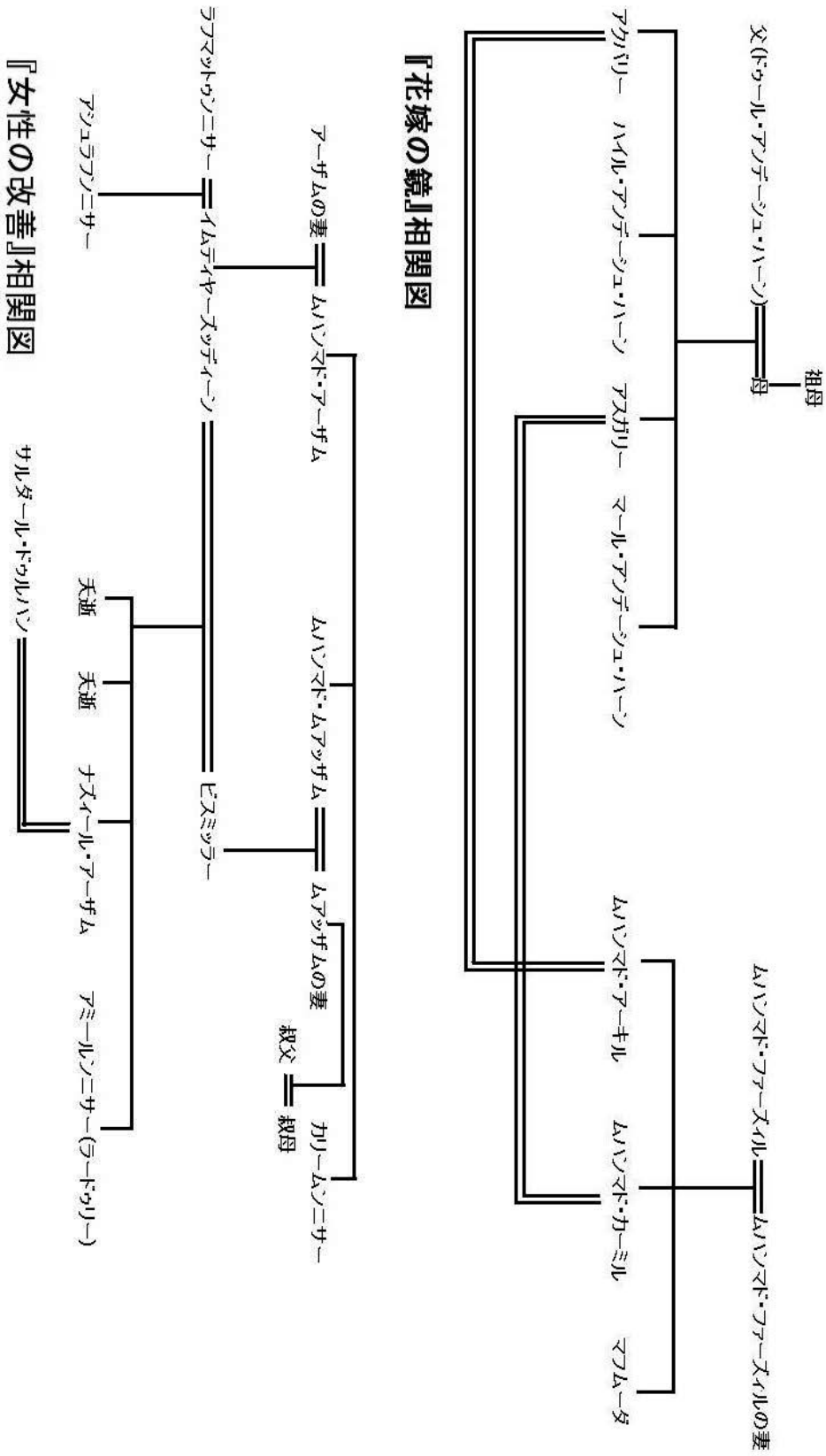
そして彼女は押し黙ってしまう。これは、アーザムの妻の叔母一人だけの声ではなかったはずである。新時代の到来とそれに伴う変化に追いつくことのできない、または気が付いていながらもそれを容易に受容あるいは理解でない女性は決して少なくなかったであろう。

おわりに

19 世紀後半になると、インドのムスリム女性たちを取り巻く環境は一変した。それまでは女子が読み書きを学ぶことは禁忌とされていたのに対し、女子教育の必要性が活発に議論されるようになり、それまで無関心であった女性問題に突如としてスポットが当てられた。このような変革を背景として、『花嫁の鏡』ではアスカリーという「理想」の女性像が強調され、家庭の維持管理という既存の女性の役割の見直し・強化に加えて、家庭外の事情にも明るい新たな女性像が求められた。それに対し、『女性の改善』で強調されるのはあくまで従来の生活・慣習の改善であり、「理想」の女性だけではなく、時にはそれに抗い、困惑しながらも次第に「改善」してゆく女性の姿である。ラシードゥンニサーの描くこうした女性の姿は、ナズィールが強調するような単なる「理想 (ideal)」ではない、より「現実 (real)」に近い姿で

あると言えよう。そしてそこに見えるのは、理想を押し付けるだけではなく、現実の女性たちに寄り添う著者、そして女性、ラシードゥンニサーの姿なのである。

〔資料１〕相関図



[資料 2]　迷信・禁止すべき儀礼一覧

『女性の改善』

（『花嫁の鏡』に比べてより多くの項目に触れているのに加え、内容についても詳細に記されている。以下は、小説に書かれた各儀礼の内容を筆者が要約したものである。）

【１．止めるべき慣習としての儀礼】

◎婚儀

・ **護符**（imām ẕāmin）**の儀式**（cf.【３．その他】護符）

花の装身具、衣装、甘味菓子、玄米、黒砂糖、パーンなどを持って、花婿の母親が未来の花嫁の許を訪れる。この儀式の目的は花嫁を実際に見ることと、どれ程の装身具を婚資（jahez）として持参するかを確かめることであった（この儀式の際、持参する装身具をすべて身に着ける慣習があったため）。未来の花嫁は目を閉じて座り、花婿の母親が彼女の膝の上に 5 個のラッドゥー（laḍḍū：ひよこ豆の粉などでできた菓子）を置き、花嫁の右上腕に護符を結ぶ。頭から顔が隠れるように垂らした花嫁のドゥパッターを花婿の母親が上げ、彼女の口に氷砂糖を入れ、花でできた装身具をつけてやる。

・ **マーンジャー**(mānjhā)

花嫁の装身具や腕輪（cūṛiyān）を外し、スハーガン（suhāgan：既婚で夫が健在な幸せな女性）たちが自分の頬に当ててから再び装着させる。カングナー（kangnā：黄色い布にオオカラシナの実とハルマラを置いて小さな包みを作り、その口を赤い紐で結んだもの）を花嫁の右手首に巻く。歌と鳴り物と共に行われる。

花嫁の家から花婿へマーンジャーの衣装を贈る行列が発つ。

ミーラーサン（mīrāsan：歌舞音曲を生業とする女性）たちが迎え入れる。歌と楽器の演奏と共に儀式は行われる。この時に、行列とともにやって来た女性の頬にビャクダンのペーストを塗る。

シャルバト（sharbat：砂糖を加えて濃縮した果汁）を供する。この作品の中では婚家の人や花婿・花嫁に供される（この時ガーリヤーン（gāliyān：結婚式など祝いの席で歌われる、わざと人を揶揄する卑猥な文句を含んだ戯れ歌）が必須とされた）。

花婿がやってくる。ミーラーサンが歌を歌い始める。マーンジャーの衣装とともにやってきた銀製の四脚の背の低い椅子（caukī）に花婿を座らせる。花婿にマーンジャーの衣装（黄色いアンガルカー（angarkhā：長袖でひざ下まである男子の上着の一種）、シルクコットン地のパージャーマ（pājāmah：男子が下半身に着用するズボン上の服）、黄色いクルター（kurtā：長袖のゆったりしたシャツ）、金糸銀糸のレースでできた裾飾りが施された赤い大判のスカーフ（rumāl）、金色の帽子、金色の靴、花でできた首飾り（hār, baddhī））を着せる。

7 個のピーンディー（pīṇḍī：小麦粉、ギー（ghī：発酵無塩バター）、砂糖を混ぜて作ったお菓子）からそれぞれ少しずつを、親戚の女子が花婿に食べさせる（どちらの親戚が行うか判断できず）。この時、トーナー（ṭonā：結婚式に歌われる歌の一種）が歌われる。

ビーラー（bīṛā：キンマの葉に石灰などを塗り、ビンロウジなどの薬味を入れて 噛めるようにしたもの）を花婿に食べさせる。合計 7 つ食べさせ、ひとつ食べさせるごとに別々のトーナーが歌われる。

- **ラト・ジャガー**（rat jagā：徹夜で行われる儀式。女性たちが祝い事の際に行う供物を捧げる儀式）歌（gīt）と共に儀式が行われる。（cf.【３．その他】供物（niyāz naẕr））

新しい竈を作り、その竈にカングナーを巻いたのちに、グルグラー（gulgulā：小麦粉に砂糖、ヨーグルト、カルダモン、アニスなどを加えてギーで揚げた菓子）を夜通し作る。この小説では結婚式の際、花嫁の家でこの儀式が行われる様子が描かれているが、それによるとは花嫁の父方の叔母が竈の火をおこすのが習わしで、その見返りとして贈り物（neg）をもらう。アッラーを主題にした歌が歌われる。

ラハム（raḥam：焼き米(ciṛvā）に砂糖と刻んだヤシの実を混ぜたもの）を作る。

髪の毛とハエを土製の丸く底の深い水がめ（ghaṛā 以下、水がめ）の中に入れて蓋をする（料理に髪の毛やハエが触れないように、との意味がある）。（cf.【３．その他】呪い（ṭone ṭoṭke）

香辛料をすり潰すための石板（sil）の下に箒をおく（結婚式の日に雨が降らないように、との意味がある）。前の儀式とは別の歌が歌われる。（cf.【３．その他】呪い）

小型の両手鉄鍋（kaṛāhī）で料理をする時に、大きなボウル（bādiyah）に水を張り、小さな石の欠片を鉄鍋の上で回してからボウルに放つ（油の消費が少なくて済むように、との意味がある）。前の儀式とは別の歌を歌いながら行われる。（cf.【３．その他】呪い）

銀製の四脚の背の低い椅子の上に水がめ、土製の水差し（badhnī）、さらに土製の浅い碗（capnī）を蓋になるように置き、一番上の浅い碗の中にグルグラーやラハム、ビーラーを入れて色鮮やかな大判のスカーフで覆い、その上から花で作ったセヘラー（sihrā：結婚式の際に花婿と花嫁がつけるヴェール）を巻き付けると、人が座っているかのように見える（アッラーに見立てている）。その四方に甘いヨーグルトの入った土製の小鍋（hanḍiyā）を置いて、4 本芯の灯明皿（caumukh）を正面で灯す。マウルヴィー（maulvī：イスラーム法の学者）を呼び、供物の前でドゥアー（duʻā：　神への祈り）をしてもらう。（cf.【３．その他】供物）

カーンジー（kānjī：小麦粉と黒砂糖を混ぜて作る[Rashīd un-Nisā’ 2007: 52]とあるが、一般的には粥や米の煮汁）を作る。

グルグラー、ラハムが配られる。

- **マルワー**（maṛvā：マンダプ（manḍap：大天幕、ヒンドゥー教の儀式を行うために仮設される建物の意）が由来か？）

天幕（shāmiyānah）を設置する。

天幕の下でドール（ḍhol：両面太鼓）を叩き、歌を歌いながら水に溶いたウブタン（ubṭan：ウコンや植物油などを混ぜて作ったペースト）を擦り付けあう。

市場から取り寄せた菓子をいくつもの丸皿（rakābī）に取り分け、預言者ムハンマド、パンジタン・パーク（panj-tan pāk：預言者ムハンマド、ファーティマ、アリー、ハサン、フサインの 5 聖人）、先祖へ供物を捧げ、ファーティハ（fātiḥah：聖者などの名において供物を捧げる）を行う。（cf.【３．その他】供物）

親族や使用人に新しい服が贈られる。

ガーズィー・ミヤーン（聖ガーズィー・サイヤド・サーラール・マスウードGẖāzī Saiyyid Salār Masʿūd）の名において白い雄鶏、ミヤーン・ジャラール（ベンガルのスーフィー、聖シャー・ジャラールḤaẕrat Shāh Jalālか？）の名において赤い雄鶏、ミヤーン・ハティーレー(Miyān Haṭīle)[20]の名において赤い雄鶏、聖女サハジャー(Bībī Sahjā)の名において雌鶏をイスラーム法に則って屠り、それぞれ別々の料理を作って供物とし、ファーティハを行う[21]。（cf.【３．その他】供物）

ダフ（daf：大型タンバリン）奏者がサイヤド・アフマド・カビール（聖者アフマド・カビールゥッリファーイーSayyid Aḥmad Kabīr al-Rifāʾī）の名において２頭の牡山羊をイスラーム法に則って屠り、その肉で作ったカバーブと炒った７種類の穀物（米、小麦、大麦、とうきび、キビ・アワなどの雑穀）を供物としてファーティハを行う。（cf.【３．その他】供物）

聖者ガーズィー・ミヤーンの両目（小麦粉で目（ānkhiyān）の形を作り、砂糖と牛乳で煮た物をガーズィー・ミヤーンへの供物にする。（cf.【３．その他】供物）

- **サヘナク**（ṣahnak：ファーティマの名において菓子もしくは食事を壺（kūnḍā）に入れて供物にする）（cf.【３．その他】供物）

箕（sūp）に玄米、ギョウギシバ（dūb）、ターメリック、カングナーを巻いた土製の水差しを置き、使用人の中から選ばれた７人のスハーガンたちが箕と６個の水がめをそれぞれ頭の上に乗せる。箕と水がめが隠れるように赤い布が被せられる。鳴り物を鳴らす人が先頭に立ち、選ばれたスハーガン、その後ろに親族や他の使用人の女性が連なってファーティマの歌を歌いながら川岸へ行き、水がめにサヘナク用の水を汲み、天幕へ戻る。

７人のスハーガンが料理をする。７枚の丸皿に炊いた米、ヨーグルト、砂糖、ドライフルーツ、オニバスの実（makhānā）、花、パーン、女性用の金製のリング状の鼻飾り（nath）を置く。それぞれの丸皿に７本の腕輪、メヘンディーの粉、鉄漿（missī）、土製のグラス(piyālah)に髪に付ける良い香りの香辛料を置いてすべてを赤い布で覆う。

別の丸皿にも花、ビーラー、ドライフルーツ、ヨーグルト、砂糖、オニバスの実を入れる。空いた丸皿をサヘナクの料理の前に置き、その他にも 12 枚の丸皿、７つの子供用玩具（caṭṭā baṭṭā）７枚の小型の箕（suplī）、７つの蓋つきの籠（ṭokrī）を置き、預言者ムハンマド、ハディージャ（預言者の最初の妻）、ファーティマ、パンジタン・パーク、マースーミーン（maʿṣūmīn： 預言者、ファーティマ、アリー、ハサン、フサイン、12 イマーム）、そして夫を残して亡くなった女性へ供物として捧げる。（cf.【３．その他】供物）

選ばれた７人のスハーガンがファーティマへの供物を、再婚しなかった未亡人がハディージャへの供物を、その他のスハーガンが夫を残して亡くなった女性への供物を食べる。

---

[20] ガーズィー・ミヤーンの姉妹の息子[Crooke 1994: 129]

[21] ビハールの５大聖者はガーズィー・ミヤーン、ミヤーン・ハティーレー、サハジャー、パリハール（Parihār）、アジャブ・サラール（ʿAjab Salār）[Crooke 1994: 130]

サヘナクに被せた赤い布、腕輪、鉄漿、頭に塗る良い香りの香辛料がサヘナクを食べた人みなに配られる。スハーガンたちが「ファーティマへの供物の際に私への食事も用意されますように、スハーガンのまま死ぬことができますように」とドゥアーをする。

選ばれた 7 人のスハーガンの食事の中から 1 口分ずつ取り分けておいたものを花嫁に食べさせる。

預言者とパンジタン・パークへの供物は花婿の家へ送られ、マースーミーンへの供物とその他の玩具などは子供に与えられる。

サヘナクを食べたスハーガンたちが手を洗った水は銅製の平鍋（lagan）に集められ、捨てずに貯めておく。

天幕に貯水池が掘られ、サヘナクに使用する米を洗った水、炊いた水、スハーガンたちが手を洗った水を捨て、四角い台で蓋をして、その傍に色とりどりの模様が描かれた水がめ（galsā）を置く。その中に 1 パイサー硬貨とマンゴーの木の枝を入れ、葉が外にはみ出すようにして蓋をする。その蓋の上にケツルアズキを置き、さらに 4 本芯の灯明皿を置く。

- **聖ヒズル**(khvājah khiẕr：不老不死とされる水の聖者)**の筏**（beṛā）**を流す**（cf.【３．その他】供物）

赤い紐を芯にしてギーで灯した灯明皿（cirāgh）を乗せ、花で作ったロープを巻いた２艘の筏の底に 4 つの水がめを括り付け、すべての水がめに 1 パイサー硬貨、1 欠片の氷砂糖を入れて、飾りのたくさんついたドゥパッターで覆う。筏、ロート（roṭ：製粉しない小麦粉を甘く味付けて練り、厚めに焼いた菓子）とダリヤー（daliyā：挽き割にした小麦などの穀物を牛乳で煮た料理）といった供物を、ダフ奏者がダンカー（ḍankā：大型太鼓の一種）を叩き、女性使用人がヒズルの歌を歌いながら川へ持って行く。筏を川に流す。ロートとダリヤーは持ち帰って食べる。（cf.【３．その他】供物）

- **バダーワー**（badhāvā：親族の者が花婿や花嫁の両親のために衣装を作らせる、またはそれを着せる儀式）
- **メヘンディー**(mihndī)

箕に水に浸しておいた玄米、黒砂糖、ギョウギシバ、カージャル（kājal：油煙を材料とし、美容や邪視除けの目的で眼のふちに塗られる）を入れる箱（kajlauṭī）、未使用の灯明皿、ビンロウジの実とパイサー硬貨を置く。使用人の中から 7 人のスハーガンが選ばれ、その箕を手にカリッサの木を引き抜いて来て、チョウセンアサガオの脇に植える。ビンロウジの実とパイサー硬貨に辰砂（sindūr）を塗って、カリッサの木の側に「今日招かれ、明日掘り起こして連れて行く（āj nevte jāte hain kal ukhāṛ kar le jāʾe n ge）」といいながら埋め、カリッサの木とチョウセンアサガオにも辰砂を塗る。スハーガンたちが問答をしながら 7 回箕の上を跨ぐ。みなが 1 掴みの玄米を頬張る。灯明皿に火を灯し、片目にカージャルを塗る。その後、家に戻る。

ハッジャーマン（ḥajjāman：理髪生業とするカーストの女性）と 7 人のスハーガンがやってくる。ハッジャーマンが花嫁の爪を切り、スハーガンがウブタンを塗る。バラートの日には 21 回塗る。

メヘンディーを手足に塗る。

- **サーチャク**（sācak：婚礼の前に花婿の家から花嫁の家に衣装、メヘンディー、化粧道具やお菓子などを送る儀式）

花婿の家から花嫁の家へ、婚礼衣装一式、チャウティー（cauthī：挙式 4 日後に行われる儀礼）の衣装一式、金のセヘラー（sone kā sihrā：銀糸の上から金メッキを施した糸で作られるセヘラー）、香油、砂糖、ドライフルーツ、オニバスの実、ビンロウジの実、化粧品などを入れるバスケット（suhāg puṛā）などの贈り物を持った行列が発つ。バスケットの中にはナツメグ、メース、ビャクダン、ターメリック、ピスタチオ、アーモンド、オニバスの実、クローブ、カルダモン、辰砂、ベイリーフ、フェネグリーク、カンショウ、頭に付ける香辛料の小さな包みが入っている。

- **セヘラー**

金のセヘラー、ミクナー（miqnaʿ：頭から地面まである婚礼用のヴェール）、花婿の衣装一式などが花嫁の家から花婿に贈られる。

- **バラート**（barāt：結婚行列）象や馬、花火などとともに、花婿が花嫁の家にやってくる。

花婿が降りた馬に子供を乗せる。花婿はその子に祝儀を与える。

花婿が女性居住区（zanānah）へ入ろうとするのを花嫁の兄弟（または従兄弟など）が止める。花婿は彼らに祝儀を渡すことで中へ入ることを許される。

花嫁のもとまで 40 ガズ（約 3.6 メートル）の赤い敷物が敷かれており、花婿は歩いて花嫁のところへ行く。玄米、氷砂糖、パーン、赤い紐、小麦粉の 7 枚の灯明皿と炊いた米の 7 掴み分が入った箕を手にしたミーラーサン、首にドールをかけたミーラーサンが呼ばれる。ミーラーサンが花婿の両頬を箕に置かれた灯明皿で照らし、7 つの灯明皿と 7 掴み分の米を花婿の頭上で回してから投げ捨てる。敷物の上にパーンと氷砂糖の欠片が置かれ、花婿はそれを拾って誰かに渡さなければいけない。花婿の母や姉妹に対するガーリヤーンが歌われる。

花婿と花嫁の間に赤いドゥパッターで仕切りがされる。

花嫁の手に布を巻き、その上にゴマと黒砂糖を置いて、仕切り越しに花婿の前に差し出させる。花婿はそれを、手を使わずに口のみで食べる。

ミーラーサンが花婿の首に紐をかけ、首を絞める。ご祝儀と引き換えにその紐を外す。

パーンに氷砂糖のかけらを包んで花嫁の口に含ませ、すぐに口から出して捨てる。

氷砂糖のシャルバトを作って花婿に飲ませる。

一人の女性が耳にホウ砂をつけてやって来て、「金にはホウ砂、真珠には糸、花嫁には吉兆の時、花婿には継続した関係(sone men suhāgā ho gā motiyon men dhāgā bannī ko jog banne ko lāgā)」と言う。花婿は「継続した関係(lāgā)」と言う。

花婿の背後に花嫁を立たせ、靴を履いた足で花婿の肩をひと蹴りさせ、その靴を天幕の上に投げ捨てる。

花婿が女性居住区の外へ出てくると、歌舞の宴が夜通し続く。

朝、花婿にシャルバトを飲ませる。

銀製の小さい碗（kaṭorī）にマリーダ（malīdah：牛乳、バター、砂糖、小麦粉などでつくるケーキ）、カジュラー（khajlā またはカージャーkhajā とも：小麦粉を材料にギーで揚げ、砂糖水に浸した菓子）を牛乳に浸し、花婿に食べさせる。

花婿に水煙管（ḥuqqah）を吸わせる。

花婿側の女性も花嫁の家へ向かい、花嫁側の女性たちは彼女たちを頬にビャクダンを塗り、鳴り物を鳴らして迎え入れる。シャルバトを飲ませ、チョーバー（cobhā：ドライフルーツの混ざった甘い米料理）を食べさせる。花嫁の家から花婿の家へ、21 の衣装、オニバスの実、ドライフルーツ、食器類など婚家顔合わせ（samadh milāvā）の贈り物が贈られる。

植えていたカリッサの木とビンロウジの実、パイサー硬貨を掘り起こし、埋める時に入れていた箕に入れ、塗らなかったもう一方の目にカージャルを塗る。カリッサの木の根、ビンロウジの実、パイサー硬貨を、パーン売り（tambolī）のもとへ送り、このビンロウジの実を刻んで入れた 21 個のパーンを作らせる。このパーンはミーラーサンに渡される。カリッサの木の葉は寝具（toshak）とクッション（takiyah）に入れられる。

花嫁に衣装を着せ、身支度を整える。

・ **リート・ラスム**（rīt rasm：ニカーフの後、もしくはルフサティー（rukhṣatī：花嫁が実家から婚家へと移ること）の際に花婿、花嫁に対して女性たちが行う儀式）

女使用人たちが歌いながら花婿を迎えに行き、女性居住区へ連れてきて、天幕の下に座らせる。

サーチャクの際に花婿側から花嫁へ贈られた化粧品などを入れるバスケットの中から、包みをひとつ花婿に選ばせる。中身がナツメグなら最初の子は男の子、辰砂やターメリック、ビャクダンなら女の子が生まれると信じられていた。（cf.【２．迷信】）

バスケットの中の包みをすべて開け、7 人のスハーガンが香辛料を挽いて、銀製の小さな椀に入れる。この時、周りから見えないように女性たちの上に赤い布がかぶせられる。

・ **アールスィー・ムスハフ**（ārsī muṣḥaf：鏡を介して花婿が花嫁の顔を見る）または**ジャルワ**（jalvah：鏡を介して花婿が花嫁の顔を見る儀式。聖クルアーンの章（sūrah）を朗誦する（どの章かは記載なし））。

【ジャルワの例】

近親の女性たちが花嫁に婚礼衣装を着せ、スハーガンたちが装身具を身につけさせ、父親が 6 人のスハーガンの頭に触れさせた花のセヘラー、その上から金のセヘラーを結ぶ。

天幕の下に婚資の銀製の寝台（palang）置き、その上に寝具、クッションを設える。寝台の前にクッションを乗せた銀製の 4 脚の背の低い腰掛け（pīṛhī）を置いて花婿を座らせる。

花婿のセヘラーとミクナーをまとめてたくし上げ、頭上に置く。

花婿の背後に低い台を置いて、花婿の姉妹（いない場合は従姉妹など）がその上に座り、ドゥパッターの裾を花婿の頭上に垂らす。

寝台と腰掛けの間に赤い布で仕切りがされ、スハーガンたちがその寝台の上に寝そべる。花嫁が連れてこられ、顔が西に向くように座らせられる。スハーガンたちが寝台から退く。

花婿の両側に松明を持った女性が立ち、打ち上げ花火（mahtāb）が両側から上げられ

る。

ミーラーサンがドーラク（ḍholak：両面太鼓）と金属製の椀（kaṭorā）を持ってきて寝台に座り、トーナーを歌いながら花婿にパーンを食べさせる。ミーラーサンが一握りの米を手に寝台の上に立ち上がり、聖クルアーンの「開扉章」を朗誦し、四方に米を撒く。

花嫁はセヘラーの下で両手が重なるように額に置く。セヘラーの上から赤いドゥパッター（vālā）を差し込む。花嫁が立ち上がり、間の仕切りが花嫁の頭から手首まで見えるあたりまで降ろされる。

花婿は花嫁を見るように言われる（ただしセヘラー、ミクナーで顔は見えない）。ミーラーサンが花嫁の両手を持って振りながら、ジャルワの歌を歌う。

花嫁を座らせて仕切り布をどけ、ミーラーサンが大判のスカーフに玄米を包み、花婿に向かって投げる。花婿はそれを花嫁の頭上に投げる。再び仕切りがされる。これを 7 回繰り返す。

花嫁の赤いドゥパッター、仕切り布が除かれる。花婿を寝台の上に花嫁の右側に座らせる。ビャクダンと頭に塗る香辛料、1 ルピー硬貨が運ばれてきて、花婿はその硬貨で花嫁の髪の分け目にビャクダンを塗る。その後、花嫁の頭に香辛料が塗られる。

花嫁の手に氷砂糖の欠片が置かれ、花婿はそれを手で取り食べる。花嫁の肩に氷砂糖の欠片が置かれ、花婿はそれを手で取り食べる。花嫁の頭に氷砂糖の欠片が置かれ、花婿はそれを口で直接食べる。

花婿の大判のスカーフと花嫁のドゥパッターの端を結ぶ。花婿は「前世からの結び目だ」と言う。ミーラーサンが「この花嫁は私たちの？それともあなたの？」と聞くと、女性たちが「私たちの」と答える（イムティヤーズッディーンが拒否したため、この中には花婿がどのような返答をするのか、またはしないのか、詳細が描かれていない）。花婿の手を花嫁の背に置く。

バラートの夜に天幕の上に投げられた花嫁の靴を降ろし、その中にカージャルを入れ、花婿の片目に塗る。

花嫁のセヘラーを上げ、花婿に顔を見せる。

女性たちは花嫁、花婿の頭上で硬貨を回し、儀礼を行ったミーラーサンの金属製の椀に入れていく。

花婿は立ち上がり、四方に向かってサラーム（salām：右手先をそろえて胸の前または額まで上げる挨拶）をする。

女性たちは花婿の前に敷かれた大判のスカーフに花嫁、花婿への祝い品（salāmī）を入れていく。

- **家を満たす儀礼【ghar bharne kī rasm 花嫁の家】**

花嫁、花婿が立ち上がり、花嫁は胸の前で、花婿は背後で両手を椀の形にし、その中に玄米が入れられる。玄米を放る。この時、花嫁は心の中で「両親の家を満たします(mān̲ bāp kā ghar bharte hain̲)」と唱える。これ 3 回繰り返す。

- **ルフサティー**

花嫁の姉妹（あるいは親戚の女子）が花婿の靴を隠す。ご祝儀と引き換えに靴を花婿に返す。

婚資の品がそれぞれ大判のスカーフに包んで運びだされる。品物を包む前に、婚資と共に贈られる米の中から 5 摘み分の米を取り出しておき、それを婚資が保管されていた部屋に撒く（家の財産が娘の婚家に流れてしまわないように、との意味がある）。（cf.【３．その他】呪い）

花婿が花嫁を胸に抱き、輿（pālkī）に乗せる（ミーラーサンがこの役割を担うこともあり、その場合花婿は花嫁の右手の指を握る）。

ルフサティーの歌が歌われる。

女性たちに米が配られ、花嫁の乗った輿に向かってその米を投げる。

花嫁が去ったのち、母親は水を張った首の少しくびれた小さな水入れ（loṭā）を手に框に座り、しばらくその中に右手を浸した後、水を中庭に捨てる（花嫁が出戻らないように、との意味がある）。（cf.【３．その他】呪い）

- **花嫁を迎え入れる儀式**

花嫁を迎え入れる水がめに水とマンゴーの木の小枝を入れて、その上にヨーグルトの入った土製の小鍋を乗せ、使用人に頭上に乗せるようにして持たせ、スハーガンたちが箕に玄米やギョウギシバ、ターメリック・茹でた米、火の灯った灯明皿を持ち、ミーラーサンがドールを叩いて歌いながら花嫁を迎え入れる。

輿に水がめと土製の小鍋を置き、その中に花嫁の手を入れさせる（花嫁が暇を持て余さないように、との意味がある）。（cf.【３．その他】呪い）

花嫁の口に氷砂糖と絹を含ませる（花嫁の会話が甘く、柔らかなものであるように、との意味がある）。（cf.【３．その他】呪い）

花嫁に子供を抱かせる（早く子宝に恵まれるように、との意味がある）。（cf.【３．その他】呪い）

輿の傍で一頭の牡ヤギをイスラーム法に則り屠り、その血を花嫁の右足の親指に塗る。

スハーガンが花嫁を胸に抱き（花婿は花嫁の指を握る）、花嫁と花婿を天幕の下に連れていき、座らせる。

花婿の姉妹が婚資として持参した銅製の平鍋と水を張った首の少しくびれた小さな水入れを持ってきて花嫁と花婿の足を洗い、その水を家中に撒く。

- **家を満たす儀礼【花婿の家】**

花嫁は胸の前で、花婿は背後で両手で椀を作り、その中に玄米が入れられる。玄米を放る。この時、花嫁は心の中で「婚家を満たします」と唱え、花婿は大きな声で「両親の家を満たします」と唱える。これを 3 回繰り返す。

- **礼拝**（namāz）

花嫁のドゥパッターの裾を床に広げ、花婿はその上で礼拝を 2 ラカート（礼拝の単位）行う。

- **チャウティー**（挙式 4 日目の儀式）花嫁の実家で行われる

花嫁と花婿が互いに果物などをぶつけあう（cauthī khelnā）。花婿の家から季節の野菜や果物、甘味菓子などが贈られる。

花嫁、花婿にチャウティーの衣装を着せる。

花嫁は両手で椀を作るようにして合わせ、ミーラーサンがその中に玄米、ドギョウギ

シバ、ターメリック、銀製の足首飾りを置き、花嫁がそれを放る。花婿は手で作った椀でそれを受け止める。これを 7 回繰り返す。花婿が受け止められなかったら、品物は花嫁のものに（女性たちは花婿が受け止められるかどうか賭けをする）。

花嫁に花で飾られたステッキ（chaṛī）が渡され、それで花婿の背中を 7 回叩く。花婿も同様に。

花嫁の親族の女性が花婿を花で飾られたステッキで叩いたり、野菜や果物を投げつける（花婿もやり返すかどうかは不明である）。その後、女性同士も互いに投げ合って遊ぶ。

◎ 出産

・ **ナウ・マーサ**（nau māsah：妊娠 9 か月目に行う儀式）

夫（イムティヤーズッディーン）が儀式に参加しなかったためこの儀式で男性が何をするのか詳細は不明である。

銀製の爪切りと小さな椀、パンジーリー（panjīrī：小麦粉、コリアンダー、ギー、クミン、砂糖で作られる食べ物で、産婦の滋養剤）、産婦と夫の衣装、5 種類の果物（グアバ、バンレイシの実、ケーオラー、オオサンカクイの実、ヤシの実）、5 種類のドライフルーツ（干しブドウ、ピスタチオ、アーモンド、ナツメヤシ、オニバスの実）、アチュワーニー（achuvānī：産婦に与えられるアジョワンにひねしょうが、ナッツなどをすりつぶしたものをギーで揚げた特別の料理）、ジャナム・グッティー（janam-ghuṭṭī：新生児に初めて与えられる薬）、プーリー（pūrī：揚げパン）、グルグラーなどの料理が用意される。

ミーラーサンたちが妊婦の義母や義姉妹へのガーリヤーンを歌う。

妊婦・夫に用意した衣装を着せ、セヘラーを着けさせる。妊婦の膝に赤い小さなハンカチ（rumālī）を敷き、その上にドライフルーツや果物、料理、硬貨などを置いて包む。

パンジーリーを妊婦が自分の手から夫に食べさせる。

銀製の爪切りで妊婦の爪をきり、小さな椀に入れる、鉄漿、スルマ（surmah：アンチモンや鉛で作られるまぶたの内側に塗る黒い粉）をつける。

パンジーリーを親族に配る。

・ **生誕 6 日目の儀式**

夫（イムティヤーズッディーン）が儀式に参加しなかったためこの儀式で男性が何をするのか詳細は不明である。

ミーラーサンが呼ばれ、21 枚のローティー（roṭī：無発酵の薄焼きパン）、できる限りの青物野菜、魚、牛肉、ヤギ肉、プーリー、ヨーグルトなどが用意される。

星をみる儀式（中庭に用意された台座（takht）に、装飾のたくさんついた衣装とセヘラーを身に着けた母親が子供を抱いて立つ。その台座の四方には色粉や小麦粉で描かれる四角い床面装飾（cauk）が描かれる。母親のセヘラーを上げ、その前に剣を手にした女性と火の灯った 4 本芯の灯明皿を乗せた平盆（thālī）を手にした乳母が立つ。21 枚のローティーが運ばれてきて、母親がそのローティーを歯で千切って乳母に渡し、星を見る。女性たちが「何を見ているの？」と尋ねたら、母親は「繁栄した夜(phalī phūlī rāt)」

と答える。これを 21 回繰り返す。この後、夫が矢を放つ儀式が行われる（イムティヤーズッディーンが拒否したため詳細は不明である）。

産室に用意したプラーオ（pulāʾo：炊き込みご飯）やできるだけ多種多様な野菜・肉・魚料理やプーリーを運び、7 人のスハーガン（うち一人は子を産んだ母親）が食べる。この際、産婦は子供を抱く。お腹一杯食べるように、そうしないと子供が食べ物に困ることになる、と言われる。新鮮な水と、汲んでから時間のたった水を混ぜて母親に飲ませる。この時に母親が食べた物は将来子供にも与えられると信じられているため、多くの料理が用意される。（cf.【３．その他】呪い）

銀製のインク壺、筆（qalam）を用意し、子供の手に筆を持たせ、中庭に引き入れられた馬に乗せる（勉強、乗馬ができるようになるように、との意味がある）。（cf.【３．その他】呪い）

◎ 葬儀

・ **プール**（phūl：死後 3 日目に行われる儀式で、聖クルアーンが朗誦され、会場に花が飾られる）

平盆に花、パーン、グラスに入った芳香油、ビャクダンの粉、線香が運ばれてきて中庭に置かれ、線香が燃やされる。故人よりも年の若い女性が順番に花を手に取り、芳香油の入ったグラスに入れ、パーンを取る。

故人を沐浴させた部屋に灯明皿を灯し、供え物をする係の女性が選出される。（cf.【３．その他】供物）

・ **家族の一員が亡くなった際に隣り近所にローティーを配る**

・ **チェヘルム**（cihlum：死後 40 日後の追悼の儀式）**の供物と魂を抜く儀式**

故人を沐浴させた部屋の床に敷布を敷いて寝台と枕を置き、その上に男性の衣装一式を並べて上から布をかける。こうすると誰かが寝ているように見える。その前に銀製、銅製の丸皿を置く。その他にも銀製品（パーンを噛んだ後の液を吐く壺（ugāl-dān）、平盆、香油入れ（ʿiṯr-dān）、バラ水入れ（gulāb-pāsh）や食器類）、さまざまな料理（プラーオー、ザルダ（zardah：サフランで黄色く色づけした甘い米料理）、フィルニー（firnī：ライスプディング）など）が置かれる。クルアーニー（Qurʾānī：聖クルアーン読み）が聖クルアーンを朗誦し霊魂の立ち去り（rukhṣatī）を詠んだところで、魂が家から出て行ったと解釈される。用意したすべての供物、さらに故人が亡くなった日に灯された灯明皿がクルアーニーに与えられる。クルアーニーはそれを一度ですべて運ばなければならず、去り際、後ろを振り向いてはならない。彼の通った場所は箒で掃き清められる。この後、女性たちは喪中に禁止されていた鉄漿やスルマをつけ、紅（shahāb）やメヘンディーなどに触れる。

２．迷信

◎妊娠・出産関連

妊娠が判明したらスルマ、鉄漿、爪を切ることは禁止される。

◎ 病気関連

疱瘡にかかった際、患者（子供）の本名は呼ばずに「マーター・マイヤー（Mātā Maiyā：疱瘡神の別名）」と呼ぶ。夕方、水を撒いて道を冷やす。青物野菜にターメリックを入れること、肉・魚を料理すること、小型の両手鉄鍋で料理することカッサーバン（qaṣṣāban：蓄殺を生業とする者の妻）が家に出入りすること、クミンなどの香辛料を熱したギーで豆などに香りづけすること（ヒンドゥー教（cf.【３．その他】他宗教との混同））、ロバにひよこ豆を食べさせること（ヒンドゥー教（cf.【３．その他】他宗教との混同））が禁止される。

昼間は精霊・霊鬼（jin）や妖精（parī）の載った乗り物が通る時間で、悪霊が歩き回っているので、回廊を走ってはいけない。その乗り物の影に触れると病気になる。

体調が悪くなった時に、帽子が一緒に無くなる（精霊・霊鬼の陰に触れたために体調を崩したことを示す）。

◎ 死に関連

プール（死後 3 日目に行われる儀式）の日に燃やされた線香が途中で消える（寿命が尽きる前に無くなったことを示す）。

◎ その他

3 日目の月を目にすると災いが起きる（ピーラーニー（pīrānī：日本でいう巫女）を呼んで 3 日目の月に関連した物語を聞く。その後、ピーラーニーが「三日月は持ち去られたか（tīsrī tārīkh ke cānd kī ab girah kaṭ ga'ī）」と尋ねるので、女性は「はい」と答える。この問答を 3 回繰り返すことで、災いから逃れることができる。

３．その他

◎断食（rozah）

- **約 3 時間強の断食**（savā pahr kā rozah）預言者の娘婿で 4 代カリフ、アリーの名において、毎月 7 のつく日のいずれかに行われる。朝 9 時、沐浴をして濡れた足のままジャレービー（jalebī：かりんとうのシロップ漬け）などを食べて断食を解く。断食が明ける前に物語を聞く。この小説の中ではムグラーニー（mughlānī：針子・使用人）が語り聞かせる。
- **聖ヒズルの断食**（Ḥaẕrat khvājah khiẕr kā rozah）バードーン月（bhādon：インドの太陰太陽暦の 6 月、西暦 8～9 月）に 1 日のみ行われる断食で、大きなローティーが作られ、ざら目の砂糖（bhūrā）、阿仙薬（kath）、氷砂糖、パーンをそのローティーの上に置いて、供物として捧げられる。パーンなどを川に流す。このあと、新葉のパーンを食べる。（cf.【３．その他】供物）
- **聖女アースの断食**（Bībī Ās kā rozah）パーグン月（phāgun：インドの太陰太陽暦 12 月、2～3 月）の日中に行われる断食で、小麦粉に砂糖を混ぜて焼いたもので断食を解く。
- **聖女ヌールの断食**（Bībī Nūr kā rozah）アガン月（aghan：インドの太陰太陽暦 9 月、西暦 11～12 月）に行われる断食で、新米でグラッティー（gulatthī：よく煮て柔らかくし

た米料理。病人食として用いられる）を作り、それで断食を解く。

◎ **ピール・キラーナー**（pīr khilānā）少しでも何か願い事や祝い事、病気、災いがあると、ピーラーニーを仲介として聖者や精霊・霊鬼、妖精を呼び出し、解決法を尋ねたり、願掛け成就の供物や祝いの品などを供える。ピーラーニーが三つ編みを解き、髪を結んでいた紐を投げ捨て、跪拝する。頭が震え始めたら、精霊・霊鬼や聖者が乗り移った証である。（cf.【３．その他】供物）

例：気に入らない縁談が破談を祈願する。

：理想の結婚式が挙げられるよう祈願する。

：病気になった時に快復を祈願する。

：結婚が決まった時にお礼をする。

◎ **聖者や先祖などへの願掛け**（mannat）

気に入らない縁談が破談になるよう祈願する。

病気になった時に快復を祈願する。

誰かの無事を祈願する。

5 パイサーまたは 5 アーナー、1/4 パイサー分の砂糖が小包で市場から届く。それを供物としてアリーへのファーティハを行う。女性はそれを立ったまま食べる（khaṛā pūṛah）（何のために行われるかは記載なし）（cf.【３．その他】供物）

壺に炊いた米、ヨーグルト、砂糖を入れて、これを供物に聖ディーダールのファーティハを行う（Pīr Dīdār kā kūnḍā）。誰か会いたい人がいる場合に行われる）。（cf.【３．その他】供物）

11 ダムリー（ムガル時代発行の硬貨）分の甘味菓子（gyārah damṛī kī miṭhā'ī）を聖ガウセ・アーザム（Ḥaẕrat Ghauṣ-i A'ẓam スーフィズムの教団のひとつカーディリー教団の創始者と言われるアブドゥルカーディール・ギーラーニーAbdul-Qādir Gīlānī）に捧げる。誰か会いたい人がいる場合に行われる。（cf.【３．その他】供物）

ラハムを小型三脚卓（tipā'ī）に載せ、アッラーに供物として捧げ、女性がこれを立ったまま食べる（khaṛā raḥam）。（cf.【３．その他】供物）

子供の結婚相手が見つからない時に、聖者の登場する、結婚にまつわる話を毎晩 1 話ずつ 40 日間聞く。

◎**呪符**（ta'vīz）

気に入らない縁談が破談になるよう祈願する。

理想の結婚式が挙げられるよう祈願する。

病気になった時に快復を祈願する。

悪霊が憑いた時に治癒を祈願する。

◎**護符**（imām ẕāmin）

疱瘡にかかった時に快復を祈願し、聖ハティール（Pīr Khaṭīr）[22]のパイサー硬貨と共

[22] 護符と一緒に硬貨を上腕に巻き付けるという行為は、これから旅に出ようとしている者に対して行われることが多いが、願掛けを行う際、その硬貨を聖者などに対する供物として用いることがある。この場合、疱瘡が治るよう、この硬貨を聖ハティールへの供物として捧げたことを意味すると思われるが、実際例や聖ハティールがどのような聖者かということについての詳細を解明することはできなかった。

に上腕に巻き付ける。

◎呪い（ṭone ṭoṭke）

土葬したのち、中庭に置かれた水を張った水がめから手のひら一杯分の水を掬い、その水で口を濯ぎ、顔も洗う（もう誰も亡くならないように、との意味がある）。

母親のドゥパッターの裾を破って屍衣（kafan）を作り、夜、カンジャル（kanjar：北中部インドに居住する指定部族民の一）の家の裏に埋めさせる（子供がもう亡くならないように、との意味がある）。

子供が亡くなった時、遺体が埋葬されたあと、5 種類の地を這う蔓になる果物を取り寄せ、子供を亡くした母親にそれらを抱かせてから四つ辻に捨てる（理由は記載なし）。

フクロウの肉を食べると夫婦仲が良くなる。

クマの背中に男の子を乗せると、丸々と肥えた良い体形に育つ。

壊れた焼き物の破片を子供の頭の上を回した後、捨てる（子供が泣かなくなる）。

産室の戸口に火が起こされ、その近くに籠に入れたキャラウェーシード、硫黄、ニンニクの外皮を置き、入室するときにはそれらを火にくべてから入る（悪い気がその火と一緒に燃えてしまうように、との意味がある）。

◎魔術（jādū）

夫が言うことを聞いてくれないのは魔術をかけられたから。

病気になったのは近しい誰かが魔術をかけたから。

◎呪文（jhāṛ phūṅk）

病気になった時に快復を祈願する。

◎ドゥアー（duʿā）

気に入らない縁談が破談になるよう祈願する。

理想の結婚式が挙げられるよう祈願する。

誰かの無事を祈願する。

病気になった時に快復を祈願する。

供物（niyāz naẕr）

親戚の無事を知った時にアリー、聖ディーダール、聖ガウセ・アーザムなどに供物を捧げる。

結婚が決まった時に行われる。

疱瘡に罹らないよう、ローティーにざら目の砂糖と紐を置いて聖ファリード・ガンジ・バフシュ(Ḥaẕrat Farīd Ganj Bakhsh)[23]の名においてファーティハを行う。その後、紐は子供の首に巻かれる。

試験に合格した時に行われる。

子供が誕生した際、中庭にニームの木の枝を植え、その下で甘味菓子（halvah）を作り、

[23] 本文には聖ファリード・ガンジ・バフシュ(Ḥaẕrat Farīd Ganj khsh)とあるが、ファリード（Farīduddīn Masʿūd Shakarganj（通称バーバー・ファリード Bābā Farīd））と聖ダーター・ガンジ・バフシュ（Ḥaẕrat Dātā Ganj Bakhsh）はそれぞれ別の聖者である。著者が二人の名前を混同したか、もしくは二人を指していると思われる。

聖ハティル（Pīr Khaṭir）[24]に捧げる。

誕生した子供の寝床が初めて敷かれる際、レーオリー（reoṛī：白ごまをまぶした砂糖菓子）を取り寄せ、チュハル・ビービー（Cuhal Bībī）に捧げる。レーオリーを寝床の四隅と真ん中の 5 か所に置き、子供たちが呼ばれ、彼らは笑顔でそれを取っていくように言われる。

◎ **マウルヴィーや占い師**（ojhā）**による占い**（fāl）

病気になった時に行われる。（例　花と香油を身につけたことと、暗がりで怯えたことで悪霊がついた。呪符を蝋引き防水布（mom jāmah）に包んで首に巻き、灯明皿の煙を浴びれば退散するだろう。（cf.【３．その他】呪符））。

理想の結婚式が挙げられるよう。

◎ **聖者廟**(dargāh)**で 40 日間のお籠り**(cillah)**を続ける**

夫が帰ってこない時に行われる。

子供が生まれない時に行われる。

子供が存命しない時に行われる。

◎ **他宗教との混同**

ブラフマンを呼び、暦を見て結婚式のための吉日を割り出してもらう。

疱瘡にかかったら庭師の妻（mālin）を毎日呼んでヒンドゥー教の賛歌（bhajan）を歌わせる。

疱瘡にかかったら、近所の川や池、湖などに出向いて礼拝（gāngā pūjā）を行う。

ホーリー（Holī：ヒンドゥー教の春祭、日本の旧暦 2 月 15 日にあたる日に行われる）を祝う。

ディーワーリー（Dīvālī：ヒンドゥー教の祭礼、灯明皿を家の周囲にともし、富の神ラクシュミー女神と厄よけの神ガネーシャを祀る。日本の旧暦 9 月 30 日に行われる）を祝う。

バサント（Basant：ヒンドゥー教の春の祭礼）を祝う。

ジーティヤー（jītiyā：子供を亡くしたヒンドゥー教徒の女性が行う断食）

[24]本文中には聖ハティル（Pīr Khaṭir）と綴られているが、これは聖ハティール（Pīr Khaṭīr）の誤りだと考えられる。

参考文献

【ウルドゥー語文献】

Ashrafī, Vahhāb. 2001. *Shād ʿAẓīmābādī aur Un kī Nasr-Nigārī*. Dihlī: Ejukeshnal Pablishing Hā' ūs.

Aʿẓmī, Ashfāq Aḥmad. 1974. *Nazīr Aḥmad: Shakhṣiyat aur Kārnāme*. Dihlī: Maktabah-yi Shāh-rāh.

Bībī Fāṭimah. 1870. *Mirāt un-Nisāʾ*. Kānpūr: Maṭbaʾ-yi Niẓāmī.

Ḥālī, Khvājah Alṭāf Ḥusain. 1924. *Majālis un-Nisāʾ*. Pānīpat: Ḥālī Pres.

Nazīr Aḥmad. 1978 [1869]. *Mirāt ul-ʿArūs*. Karācī: Tāj Kampanī.

———. [2006]. *Kulliyāt-i Ḍipṭī Nazīr Aḥmad: Nāvil*. Dihlī: Kitābī Dunyā.

Qādrī, Nāz. 1985. "Urdū kī Pahlī Nāvil-Nigār", *Kitāb-Numā.* Mārc 1985. pp.23-26.

Rashīd un-Nisāʾ. 2007 [1894]. *Iṣlāḥun-Nisāʾ: Yih Nāvil 1881 men Likhā Gayā*. Paṭnah: Khudā Bakhsh Orīnṭal Pablik Lā'ibrerī.

Shād ʿAẓīmābādī, Sayyid Muḥmmad ʿAlī. [n.d.](18--?), *Badhāvā*. Paṭnah: [n.p.].

Ṣiddīqī, ʿAẓīmushshān. 2013 [1968?]. *Urdū Nāvil: Āghāz va Irtiqā, 1857-1914*. Dihlī: Ejukeshnal Pablishing Hā' ūs.

【英語文献】

Blumhardt, J.F. 1889. *Catalogue of Hindustani Printed Books in the Library of the British Museum*. London: Longman's Co. [etc.]

———. 1909. *A Supplementary Catalogue of Hindustani Printed Books in the Library of the British Museum: Acquired during the Years 1889-1908.* London: British Museum [etc.].

Crooke, William. 1994. *An introduction to the popular religion and folklore of northern India*. New Delhi: Asian Educational Services.

Metcalf, Barbara Daly tr. 1992. *Perfecting Women: Maulana Ashraf ʿAlī Thanawi's Bihishti Zewar: a Partial Translation with Commentary*. Berkeley, Los Angles, Oxford: University of California Press.

Minault, Gail. 1998. *Secluded Scholars: Women's Education and Muslim Social Reform in Colonial India*. Delhi: Oxford University Press.

———. 2009. *Gender, Language, and Learning: Essays in Indo-Muslim Cultural History*. Ranikhet: Permanent Black.

Mookerjee, Firoz. 1992. *Lucknow and the world of Sarshar*. Karachi: Saad Publications.

Naim, C.M. 2007. "Prize-Winning *Adab*: A Study of Five Urdu Books Written in Response to the Allahabad Government Gazette Notification", Sumit Sarkar & Tanika Sarkar ed., *Women and Social Reform in Modern India*. Ranikhet: Permanent Black, pp.[44]-69.

Oesterheld, Christina. 2004. "Entertainment and Reform, Urdu Narrative Genres" in Stuart Blackburn and Vasudha Dalmia ed., *Nineteenth Century in India's Literary History*. Delhi: Permanent Black, pp. [167]-212.

Pritchett, F. 2001. "Afterword: The First Urdu Bestseller." in Nazir Ahmad, Trans. by G.E. Ward. *The Bride's Mirror*. Delhi: Permanent Black, pp. [204]-223.

Russell, Ralph. 1992. "The Development of the Modern Novel", "Nazir Ahmad and the Aligarh Movement", *The Pursuit of Urdu Literature*. Delhi: Oxford University Press. pp. 83-111, 120-150.

Sharif, Jafar.; Herklots, G.A. tr. 1972. Islam in India or the Qanun-i-Islam. London: Curzon Press.
Suhrawardy, Shaista Akhtar Banu. 2006 [1945]. *A Critical Survey of the Development of the Urdu Novel and Short Story*. Karachi: Oxford University Press.

【Web 資料】
Pietorangelo, Valerio. 2004. "Urdu Literature and Women", *The Annual of Urdu Studies*. Vol. 19. (http://www.urdustudies.com/pdf/19/10PietrangeloUrduLit.pdf) 2011 年 11 月 2 日入手.
Kalsi, A.S. 1990. "The Influence of Nazir Ahmad's Mirat al-Arus (1869) on the Development of Hindi Fiction", *The Annual of Urdu Studies*. Vol. 7, pp. 31-44 .(http://dsal.uchicago.edu/books/annualofurdustudies/pager.html?volume=7&objectid=PK2151.A6152_7_038.gif) 2016 年 1 月 22 日入手.

FINDAS リサーチペーパーシリーズは、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業の出版物です。

人間文化研究機構（NIHU）http://www.nihu.jp/ja/research/suishin#network-chiiki
NIHU プログラム　南アジア地域研究（INDAS）http://www.indas.asafas.kyoto-u.ac.jp/
東京外国語大学拠点　南アジア研究センター（FINDAS）http://www.tufs.ac.jp/ts/society/findas/

FINDAS リサーチペーパーシリーズ 3
「初期ウルドゥー語小説に現れる女性像」
村上　明香

2016 年 11 月 1 日発行　非売品
発行　東京外国語大学　南アジア研究センター
〒183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学 研究講義棟 700 号室 南アジア研究センター
TEL: 042-330-5222
http://www.tufs.ac.jp/ts/society/findas/

印刷　株式会社　美巧社　東京支社
〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-35-4　グローリア駒込 2F
TEL: 03-6912-2255

ISSN　2432-437X